

# 副葬状況からみた袋状鉄斧の地域性と機能について —古墳時代前期を中心として—

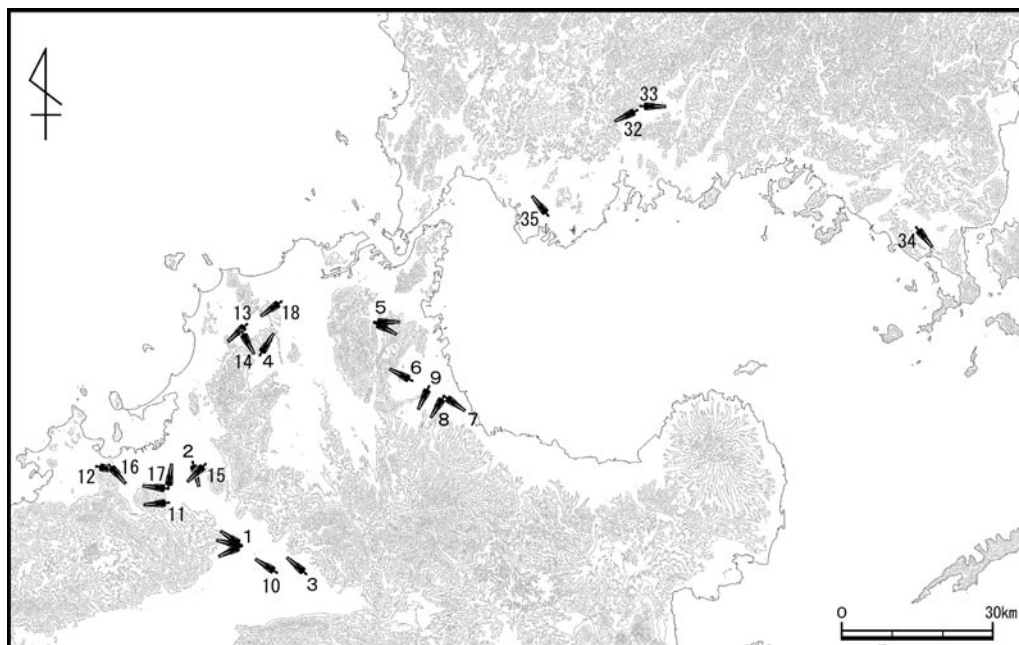
加藤 徹

## はじめに

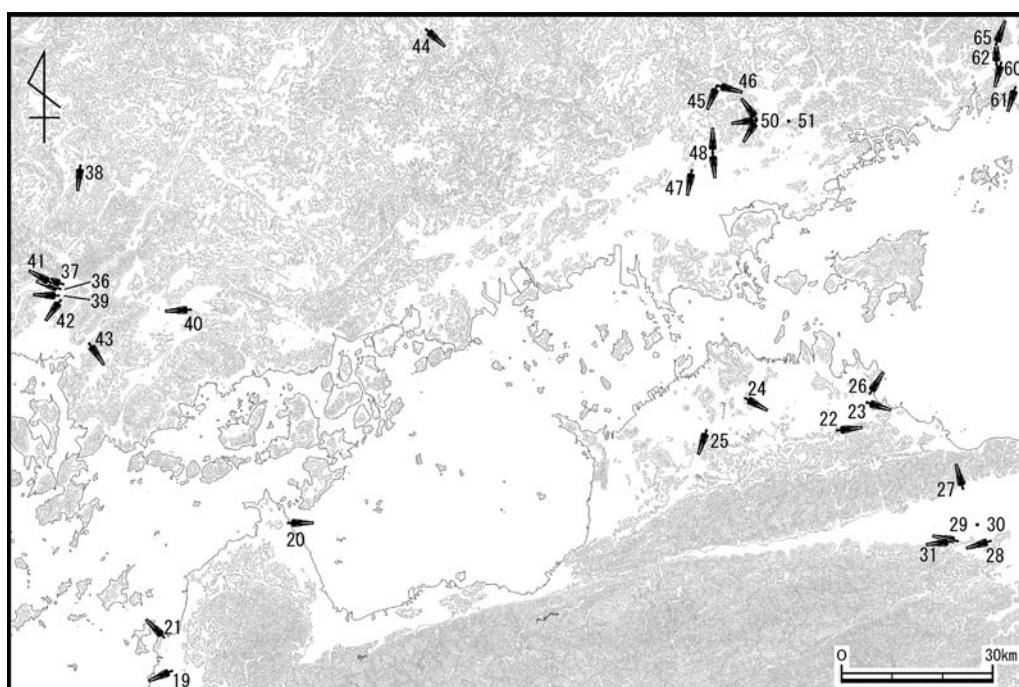
筆者は以前に古墳時代前期の袋状鉄斧の生産と流通について発表する機会を頂いた際に、弥生時代から古墳時代の袋状鉄斧の研究には、形態や大きさから時間的・空間的変遷や系譜、あるいは伐採斧や手斧などの機能を考察したものは多い一方で、国内における地域性や副葬品としての扱い方にまで言及したものは少ない点を指摘し、形態の面から中国・四国地方の地域性について述べた。<sup>(1)</sup> その際に形態と配置が互いに関係している可能性を指摘した。それ以来、より広い範囲での袋状鉄斧の副葬の様相、形態について関心があったので、本稿において前者の副葬状況について多くの視点から試論的に検討を行うこととした。対象地域は古墳時代の中心地域である畿内地域、弥生時代の中心的地域であった福岡県、およびその間に位置する中国・四国地域とする（第1～4図）。時期は古墳時代前期を中心として、弥生時代の例にも若干言及する。

## 1. 研究の視点

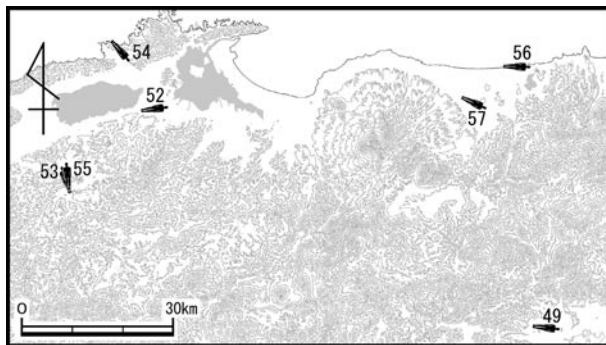
本稿では副葬状況に主眼を置くので、その分析項目としては、袋状鉄斧の副葬段階、副葬位置、一括配置副葬品の器種などが考えられる。副葬段階は今尾文昭によって第1～3段階が設定されているが、今回は棺の搬入以前、つまり粘土床内あるいは下に副葬品を配置する例が見られたので、これを含めて4つの段階を設定する。それは、第1段階が棺搬入以前の配置、第2段階が棺内への配置、第3・4段階が棺外への配置である。第3・4段階は以下のように分ける。第3段階が棺外・槨内、槨を持たない場合は棺外・墓壇底に副葬品を配置する段階で、第4段階は石槨上面、あるいは墓壇上層～上面付近へ配する場合である。一方、副葬位置は、被葬者に対しての垂直軸、左右軸に分けられる。左右軸は右・中央（右）・中央・中央（左）・左の5つに細分し、垂直軸は頭部上方・頭部周辺・胸部付近・腰部付近・脚部上半付近・脚部下半付近・脚部下方の8つに細分<sup>(3)</sup>する。一括配置副葬品は、袋状鉄斧とともに一括配置された器種であり、機能を想定する上では有効であろうと考えた。



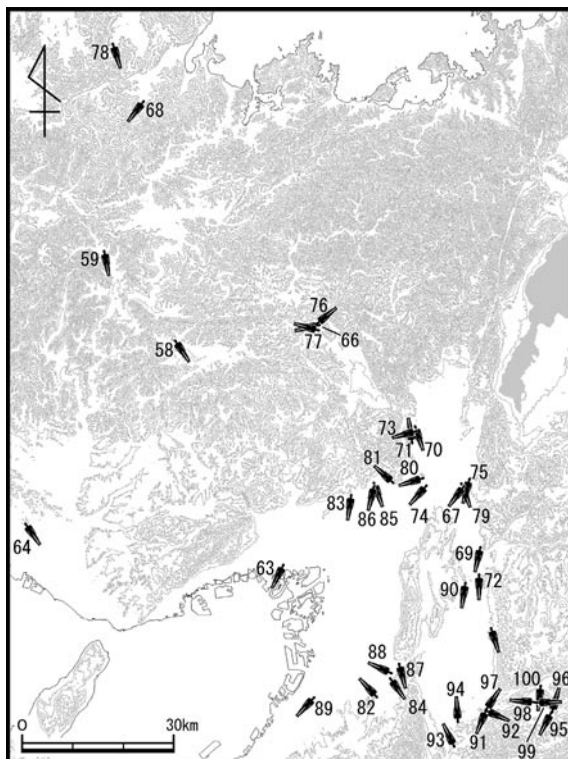
第1図 福岡県・山口県における副葬袋状鉄斧出土遺跡の分布および埋葬施設の頭位方向  
(頭部が遺跡の位置にあたる。以下第2～4図も同じ。また、等高線は100 m間隔である。)



第2図 中国地方南部・四国地方における副葬袋状鉄斧出土遺跡の分布  
および埋葬施設の頭位方向



第3図 中国地方北部における副葬袋状鉄斧出土遺跡の分布および埋葬施設の頭位方向



第4図 近畿地方における副葬袋状鉄斧出土遺跡の分布および埋葬施設の頭位方向

しかし、これらの副葬品配置状況だけでは、葬送様式が共通している根拠とするには弱いと思われるので、頭位、墳形も分析対象に加える。頭位は一般に畿内が北優位、九州が東西優位であるとされ、墳形はいわゆる「前方後円墳体制」にみるように前方後円墳を頂点とする階層秩序が想定されており、この2者は副葬品配置からでは論及することができない葬送様式における地域性あるいは階層性を示している可能性があると考えたからである。また、さらに本稿では頭位および袋状鉄斧を配置する方向の地形（指向地形とでも呼ぶべきであるが、本稿では以下、頭位指向地形、配置指向地形と呼び、両者をあわせて単に指向地形と略することもある）も分析項目として加える。それは、墳丘上で行われたであろう葬送儀礼において、墳丘上から見える地形にも意味があったのではないかと考えたからである。以上のように頭位、指向地形、墳形、副葬段階、副葬位置、一括副葬品の7項目を主な分析対象とする。埋葬施設も本来は分析

項目に加えるべきであろうが、筆者の力不足によりそこまでは至らなかったが、参考として一覧表に提示しておく。また、副葬品出土状況、被葬者の位置などを示した図面を提示すべきであったが、紙幅の都合上、表に代えたことを断っておく。

第1表 弥生時代～古墳時代における袋状鉄斧の副葬が行われた埋葬施設一覽

No.	遺跡・遺構名	墳丘	柵	棺形態	序列	棺内外／身体位置	副葬位置 頭位 (指向地形)	副葬方位 (指向地形)	鉄 斧 数	段 階	一括配置器種	周辺副葬品	文献	
福岡 県														
1a	横隈孤塚遺跡 133号壘形墓	—		壘形	主	棺外(墓壇上層)／頭部 上方／左	東北東(平→丘)	南東(平→丘)	1	4	—			
1b	横隈孤塚遺跡 102号土墳墓	—		土墳	主	棺外(墓壇上層)／脚 部下半／右	南東(平→丘)	北西(平→丘)	1	4	—		速水 1985	
1c	横隈孤塚遺跡 122号土墳墓	—		木蓋?土墳	主	棺外(墓壇上層)／脚 部上半／左	東(平→丘)	西南西(平→丘)	1	4	—			
2	宝満尾遺跡B地点 6号土墳墓	—		土墳	主	棺外?(墓壇上層?) ／左	北(丘)	?(丘?)	1	4	—		山崎 1974	
3	狐塚南遺跡 10号土墳墓	—		木蓋土墳?	主	棺外(棺蓋上?)／脚部 下半／右	南東(平→丘)	北西(平→丘)	1	3	—		小池 1994	
4	沙井掛遺跡A地区 79号木棺墓	—		箱形木棺	主	棺外(墓壇内)／胸部／ 右	南西→南南西 (平→丘)	南南東(平→丘)	1	3	—	鉄鍬2	池辺 1979	
5a	高津尾遺跡16区北地区 22号墓	—		箱式石棺	主	棺内／腰部／右	西(平→丘)	南東(丘、平→丘)	1	2	—			
5b	高津尾遺跡16区南地区 28号墓	—		箱式石棺	主	棺外(棺床盛土内)／腰 部／中央(左?)	北西(平→丘)	北(平→丘)	1	1	刀子		柴尾 1991	
6	下降田遺跡H地区 方形周溝墓 第9主体	方		石蓋土墳	主	棺内／腰部／左	南東→南南東 (平→丘)	南南西(平→丘)	1	2	—		永嶺・末永 1985	
7	徳永川ノ上遺跡C地区 X→35号墓	—		箱式石棺	主	棺外隅(蓋石下)／脚部 下方／左	北西(平→丘)	南東→東南南東(平)	1	3	—		柳田 1996	
8	徳永川ノ上遺跡E地区 1号墳主体部	方		箱形木棺	主	棺内／腰部／左	北東(平→丘、平)	東南南東(平)	1	2	鉈		柳田 1996	
9	竹並遺跡A地区 15号墳	方		箱式石棺	主	棺内／頭部／左	北北東(平)	北東(平)	1	2	刀子・鉈先・鎌		奥 1979	
10	神蔵古墳	方	石柵	組合式木棺	主	棺内／頭部上方／右	南東 (平→丘(谷奥))	南東 (平→丘(谷奥))	1	2	鉈先	鉈	木下 1978	
11	妙法寺2号墳 1号主体部	方		割竹形木棺	主	棺外隅(蓋石下粘土中) ／脚部下方／右	東(平→丘)	西 (平→丘)	1	3	—	鉈・刀子?	沢田 1981	
12	若八幡宮古墳	方		舟形木棺	主	棺内／頭部直上／右	西(平→丘)	西(平→丘)	1	2	煮理頭大刀	(離れて刀子)	柳田・副島 1971	
13a	田久山ノ坂1号墳 第1主体	方		粘土柵	割竹形木棺	主	棺内／頭部上方／中央 (左)	北東(平→丘)	北東(平→丘)	1	2	刀子・鉈		岡 1999
13b	田久山ノ坂1号墳 第2主体	方		粘土柵	割竹形木棺	副	棺内／頭部上方／中央	北東(平→丘)	北東(平→丘)	2	2	刀子4・鉈・鉈先		
14	朝町妙見1号墳 第2主体部	円		箱式石棺	副	棺外隅(墓壇内?)／頭 部上方／左	北北西(丘、平)	北(丘)	1	3	鉄鍬3・鉈先?・不明 鉄器		原ほか 1984	
15	堂業2号墳	方	石柵	組合式木棺?	主	棺外?端(柵内)／脚部 下方／中央(左)	北東(平→丘)	南西(丘)	1	3	鉄刺・刀子・鉈2・鉈 先・鎌		柳田 1984	
16a	磯崎古墳 2号棺	方	横穴式 石室	土製埴輪棺	副	棺外隅／頭部上方／右	北西(平→海→丘)	北西 (平→海→丘)	1	3	刀子		杉山 2002	
16b	磯崎古墳 3号棺			箱形木棺	副	棺外隅／頭部上方／右	北西(平→海→丘)	北北西 (平→海→丘)	1	3	鉄鍬			
17a	老司古墳 1号石室	方	竖穴系 横口	?	副	?／脚部下半→直下? ／右?	東?(平→丘)	北西→西北西(平)	3	?	刺3・刀子7・鉈6・鑿 2・鉈先・鎌・砥石		山口ほか 1989	
17b	老司古墳 3号石室			?	主	?／脚部直下(～下方) ／左	南(平→丘)	北(平)	2	?	鉄刀4・鉄刺・鉄銚2・ 鉄鍬7・短甲・刀子・鉈 2・鉈先			
17c	老司古墳 4号石室			?	副	?／脚部下半／左	東(平→丘)	西(平→丘)	1	?	鉄鍬5・鉈・鎌・不明鉄 器			
18	豊前坊2号墳	円		箱式石棺	主	棺外隅(蓋石下?墓壇 内)／頭部上方／左	北東(丘(1号墳))	北東(丘(1号墳))	1	3	鉄鍬		武田 1996	
愛媛 県														
19	朝日谷2号墳	方		割抜式木棺	主	棺内／脚部下方／左	東北東 (平→丘)	南西(平→丘)	1	2	—	鉄刀	梅木 1998	
20	箱の谷杉谷群1号墳	方		組合式木棺	主	棺外隅?(墓壇上層?) ／脚部下方／右	東北東 (平→丘)	西(平→丘)	1	4	—	—		
21	高月山2号墳	方		箱式石棺	主	棺内／頭部・右	西(平→丘)	西(平→丘)	1	2	刀子・鎌・不明鉄器		勝田 1995	
22	丸井古墳 第1石柵	方	石柵	割竹形木棺	主	棺外(蓋石下?墓壇内) ／脚部直下／左	南東(丘)	北西(丘)	1	3	鉈先・鉄鍬		宮崎 1988	
香川 県														
22	丸井古墳 第1石柵	方	石柵	割竹形木棺	主	棺外(柵内)／胸部／左	西(丘)	西北西(平)	1	3	鉄鍬3		亀井・大山 1983	
23a	奥3号墳 竖穴式石柵	方	石柵	割竹形木棺	主	棺内／頭部直上／中央	西北西(丘(、平))	西北西(丘(、平))	1	2	鉄刺・刀子・鉈		古瀬 1985	
23b	奥3号墳 箱式石棺	方		箱式石棺	副	棺内／頭部／左	西北西(丘(、平))	北西(丘(、平))	1	2	鉈			
24	園分寺大々目古墳 第1主体	方	石柵	割竹形木棺	主	棺外(柵内)／脚部上半 ／左	北西(平→丘)	東北東(丘)	1	3	鉈	(刀子)	森下 1997	
25	快天山古墳 第1主体	方	石柵	割竹形石棺	主?	棺外(柵内)／腰部／左	北(丘)	東(丘)	1	3	—	鉄鍬	古瀬 2002	
26	岩崎山4号	方	石柵	割竹形石棺	主	棺外隅(柵内)／頭部 ／頭部上方／左?	南西→南南西 (丘)	南西(丘)	2	3	鉄刺・鉄鍬・刀子2・鉈			
徳島 県														
27	蓮華谷2号墳	円	粘土柵	割抜式木棺	主	棺内／頭部／右	南(平→丘)	南東(平)	1	2	鉈・鉈		須崎・菅原 1994	
28	節岡山2号墳	円		箱式石棺	主	棺外(棺上面付近・石柵 蓋石下)／腰部／右	東北東(丘)	北北西 (平→丘)	1	4	刀子・鉄鍬	鉄刺・短冊形鉄斧	森ほか 1966	
29	曾我氏神社1号墳 第1主体	方	石柵	割竹形木棺	主	棺外(柵内)／頭部上 方?／?	東(丘)	?(東?) (丘?)	1	3	(刀子・鉈・鎌)?		天羽・岡山 1981	
30	曾我氏神社2号墳	方	石柵	割竹形木棺	主	棺外隅(柵内)／頭部上 方／右	東(丘、平)	東北東(平→丘)	1	3	短冊形鉄斧・刀子・鉈 2・鉄鍬			
31	長谷古墳	円	石柵	割竹形木棺	主	棺外隅(柵内)／頭部上 方／右	東(平、丘)	東(平)	1	3	(鉈・)鉈先・鎌	鉈	天羽ほか 1983	
山口 県														
32	新田墳墓群 第V地区 第2号箱式石棺墓	—		箱式石棺	主	棺内／腰部／右	北北東(平、丘)	北(丘)	1	2	—		村岡ほか 1986	
33	新田墳墓群 第II地区 第1号石蓋土墳墓	—		石蓋土墳	主	棺内／胸部／右	西(丘)	西(丘)	1	2	—		柴崎ほか 1982	
34	園蔵古墳	方		組合式木棺	主	棺内／頭部上方／右	北西(丘、平→丘)	北西(丘、平→丘)	1	2	短冊形鉄斧	鉈・鑿	兼安 1988	
35	松崎古墳	円		箱式石棺	主	棺内／脚部下半(～下 方)／右	南東(平→丘)	北→北北東 (平→丘)	2	2	鉄鍬2・鉈先・鉄鍬など		小野ほか 1981	
広島 県														
36	西願寺遺跡群D地点 第2号竖穴式石柵	?	石柵	組合式木棺	主	棺内／頭部／左?	東(丘)	南東(丘)	3	2	刀子2・鉈2・鑿2・鉈2		金井 1974	
37a	梨ヶ谷遺跡B地点 2号墓a主体	台形?	石柵	組合式木棺	主	棺外(石柵壁体内)／腰 部／右?	東(丘)	北(平→丘、丘)	3	3	鑿・鑿・鎌2		荒川 1998	

37b	梨ヶ谷道跡B地点 2号墓と主体	台形?	石柵	組合式木棺	副	棺内/脚部直下/中央	南東(丘)	北西~西北西 (平→丘)	1	2	—		荒川 1998
38	中出購買跡8号墳 SK1	円?		組合式木棺	主	棺内/脚部/右	北(平→丘、丘)	北北西(平→丘)	1	2	鍔・楯・鉄鏝	鉾	佐々木 1986
39	弘住3号墳	双方円	石柵	組合式木棺	主	棺内?/脚部直下/右	東(丘)	北西(平→丘)	1	2	—		石田 1983
40	オヶ迫1号墳 第2主体	方	石柵	組合式木棺	副	棺内/脚部/左	東(平→丘)	東(丘、平)	1	2	不明鉄器		銀治 1993
41	宇那木2号墳	方円	石柵	組合式木棺	主	棺内/脚部直下(～下方)/左	東南東~東 (平→丘)	西(丘)	1	2	鉾		
42	中小田1号墳	方円	石柵	組合式木棺	主	棺内?/頭部上方/中央(右)	北東(平→丘、丘)	北東(平→丘)	1	2	短冊形鉄斧		潮見 1980
43	上安井古墳	円?	石柵	組合式木棺	主	棺外(柵内)/頭部/左	北西(平→丘)	北(平→丘)	1	3	鉄鏝		渡辺 2001
44	大迫山1号墳	方円	石柵	組合式木棺	主	棺外(柵内)/脚部下半/右	北西(平→丘)	南(平→丘)	1	3	鉾(・矢筒)		潮見ほか 1998
岡 山 県													
45	みそのお墳墓群 43号墳墓 第1主体部	方		組合式木棺	主	棺外(墓壇内)/頭部上方/中央(左)	北北東(平→丘)	北北東~北東 (平→丘)	1	3	—		椿 1993
46	みそのお墳墓群 46号墳墓 第1主体部	方		割竹形木棺	主	棺内/頭部/左	西~西北西 (平→丘)	西~西北西 (平→丘)	1	2	鉄鏝2		
47	矢藤治山墳丘墓	方円	石柵	組合式木棺	主	棺外端(石柵内)/脚部下方/右	北(丘)	南(平)	1	3	—		近藤 1995
48a	七ツッロ1号墳 後方部第1石柵	方方	石柵	割竹形木棺	主	棺外隅(石柵内)/頭部上方/右	北(丘)	北(丘)	1	3	短冊形鉄斧・鉄鏝2	刀子・鉾・鉄鏝	近藤 1987
48b	七ツッロ1号墳 後方部第2石柵		石柵	組合式木棺	副	棺内?/頭部上方/中央(右)	南(平→海、平→丘)	南(平→海、平→丘)	1	2	鉄刺・短冊形鉄斧・刀子・鉄鏝		
49	有本1号墳 第2主体	方		組合式木棺	副?	棺内?/頭部上方/中央	東(平→丘)	東(平→丘)	1	2	鍔・棒状鉄器		小郷 1997
50	用木1号墳 第1主体	円		割竹形木棺	主	棺内/脚部下方/?/左?	東(平→丘)	西(丘)	1	2	短冊形鉄斧・鉾		神原 1975
51a	用木3号墳 第1主体	方円	粘土柵	平座木棺	主	棺内/脚部下方/左	南東(平→丘)	北(丘、平)	2	2	短冊形鉄斧		
51b	用木3号墳 第2主体			土嚢	副	棺内/頭部/?/左?	北(丘、平)	北東(平→丘)	1	2	鉾		
鳥 取 県													
52	社日古墳	方	木柵	割竹形木棺	主	棺内/頭部上方/右	東(平→丘)	東北東(丘、平→丘)	1	2	短冊形鉄斧・鉾・鋤先		大庭 2000
53	土井・砂4号墳	方		組合式木棺	主	棺外端(墓壇上層?)/頭部上方/右	北北西(平→丘)	北北西(平→丘)	1	4	—		和田ほか 2001
54	奥才68号墳	方		石蓋土嚢	主	棺外隅(墓壇内?)/脚部下方/左	南東 (平→丘、丘?)	北西(平→丘)	1	3?	—		赤沢ほか 2002
55	神原神社古墳	方	石柵	割竹形木棺	主	棺内/脚部下方/左	北(平→丘)	南(平→丘)	1	2	—	短冊形鉄斧・鉾・鋤・鍔2・針・鋤先	蓮岡ほか 2002
鳥 取 県													
56	馬の山4号	方円	石柵	?	主	棺内?/頭部直上/右	東(丘)	東北東(丘)	1	2	鉾?		佐々木古代文化研究室 1982
57	国分寺古墳	方円	粘土柵	割竹形木棺	主	棺外端?/頭部上方/中央?	東南東(平→丘)	東南東(平→丘)	3?	3?	鍔・鋤先?		梅原 1924
兵 庫 県													
58	内場山墳丘墓	方		箱形木棺	主	棺内/頭部(直上?)/左	北西(丘)	北西~北北西 (丘)	1	2	(鉄鏝)		中川 1993
59	ボノ山1号墓第1主体部	方		箱形木棺	主	棺内/頭部/右	北(丘、平→丘)	北(丘、平→丘)	1	2	鉾		植野 1995
60	養久山1号墳 第3主体	方円		箱式石棺	副	棺外隅(墓壇内)/頭部上方/左	北(平→丘)	北東(丘)	1	3	—		近藤 1985
61	権現山51号墳	方方	石柵	割竹形木棺	主	棺内/頭部上方/中央(右)	北(平→丘)	北(平→丘)	3	2	(銅鏝・鉄鏝)・鍔先3・石突・鉾2・鍔4・鋸		近藤 1991
62	龍子三ツ塚1号墳	方円	石柵	組合式木棺?	主	棺外(柵外)/頭部/?/左?	南(平、丘)	西南西(平→丘)	1	4	鉄刀子・短冊形鉄斧		松本 1984
63	水堂古墳	方円	粘土柵	割竹形木棺	主	棺内/頭部上方/左?	北東~北北東 (平→丘)	北東(平→丘)	1	2	鋸?	「ヤリガンナやノミを主とする鉄工具が約10点」	村川 1980
64	天坊山古墳 第2主体	円	石柵	組合式木棺?	副	棺内?/脚部下方/左	北西(丘)	南東(平、海)	1	2?	—	鉄刺	松本ほか 1970
65	新宮東山2号墳 3号墳	方		割竹形木棺	副	棺内/頭部上方/中央(左)	南南西 (平→丘)	南南西 (平→丘)	2	2	刀子		岸本 1996
京 都 府													
66	今林8号墳 第1主体	方		組合式木棺	主	棺外(棺蓋上)/頭部/中央?	東~東北東 (丘、平→丘)	東~東北東 (丘、平→丘)	1	3	鋤先		引原・福島 2001
67	上大谷6号墳	方		組合式木棺	主	棺内/脚部直下/右?	北東(丘)	南西(平→丘)	1	2	—	短冊形鉄斧	樋口ほか 1999
68	金谷1号墳 第10主体	方		組合式木棺	副	棺外(墓壇上)/腰部/?/左	北(丘)	北東~東? (丘・墳丘)	1	4	鉄刺片?・鉄鏝2・刀子・素環頭刀子?・不明鉄器		石崎 1995
69	椿井大塚山古墳	方円	石柵	?	主	棺外端(柵内)/頭部上方/左	北(丘)	北(丘)	2	3	鉄鏝・弓形工具	鍔2(右)、短冊形鉄斧2・刀子8(左)	樋口 1998
						棺外(柵内)/頭部上方/右			1	3	?	(短冊形鉄斧3)	
70	寺戸大塚古墳 前方部竪穴式石柵	方円	石柵	割竹形木棺	副	棺内/胸部/中央(右)	北(丘(後円部))	北西(丘、平→丘)	1	2	鉄刺		梅本・森下 2001
71	長法寺南原古墳 後方部竪穴式石柵	方方	石柵	木棺	主	棺外端(柵内)/頭部上方/中央 棺外隅(柵内)/頭部上方/右 棺外(柵内)/頭部上方/右 棺外(柵内)/脚部下方/左 棺外端(柵内)/脚部下方/中央	南(平→丘)	南(平→丘)	3	3	短冊形鉄斧・石臼・石杵		
						棺外(柵内)/頭部上方/右		南(平→丘)	3	3	—		
						棺外(柵内)/脚部下方/左		南~南南東 (平→丘)	1	3	短冊形鉄斧・刀子	鉄鏝・棒状鉄製品	都出・福永 1992
						棺外端(柵内)/脚部下方/中央		北(丘)	1	3	—		
72	瓦谷1号墳 第2主体	方円		組合式木棺	副	棺内(副室)/脚部下方/中央(左?)	北(平)	南(丘)	1	2	(鍔)		石井・有井 1997
73	妙見山古墳	方円	石柵	石棺	主	棺外端(石柵上面)/脚部下方/右	東~東北東(丘)	西(平→丘)	1	4	筒形銅器・銅鏝・鉄鏝		梅原 1955
74	ヒル塚古墳	方	粘土柵	割竹形木棺	副	棺外端(柵内)/脚部下方/中央	北東(平→丘)	南西 (平→丘)	4	3	鉄刺38・刀子・鉾2・鋤・鋤先・鉄鏝2		榎井ほか 1990
75	一本松古墳	円	石柵	割竹形木棺	主	棺内/頭部上方/中央	北(丘、平→丘)	北(丘、平→丘)	1	2	刀子・鉾		山田 1966

76	平山古墳	円		割竹形木棺	主	棺外(墓境内)／脚部直下／右	南西(丘)	東(丘→平一丘)	1	3	鉾		引原・福島 2001
77	園部堀内古墳	方円	粘土埴	割竹形木棺	主	棺外隅(柵内)／脚部下方／右 棺外(柵内)？／脚部下方／中央？	東(平一丘)	北西～西北西(丘) 西？(丘)	1	3	— ？(鉄・鉾・鋳・刀子・鋳先・針)		寺沢 1990
78	白米山西1号墳	方		割竹形木棺	主	棺内？／頭部／中央	北東 (丘(白米山古墳))	北東 (丘(白米山古墳))	1	2	—		広瀬 2000
79a	西山2号墳 中央柵	方	粘土埴	組合式木棺	主	棺内／頭部直上？／中央？	北北西？ (1号墳、平一丘)？	北北西？ (1号墳、平一丘)？	1	2	鉾	鏡	樋口ほか 1999
79b	西山2号墳 西柵		粘土埴	割竹形木棺	副	棺外(柵内)／頭胸部？／左？	北北西？ (1号墳、平一丘)？	北西？ (1号墳、平一丘)？	1	3	刀子・鉄鏃・不明鉄器		
80	石不動古墳 南柵	方円		割竹形木棺	副	棺内／頭部下方／左	東～東北東 (平一丘)	東(平一丘)	1	2	—	短甲・鉄刀・刀子	梅原 1955
大 阪 府													
81	安満宮山古墳	方？		割竹形木棺	主	棺内／脚部下方／左	南東(丘、平)	北西(丘)	1	2	(鉄刀)	鉄刀・短冊形鉄斧・刀子・鉾・鋳・鏃	鎌ヶ江 2000
82	真名井古墳	方円	粘土埴	組合式木棺？	主	棺外端(柵内)／頭部上方／中央(左)	南東(平一丘)	南東(平一丘)	1	3	鏃・鉾	短冊形鉄斧・刀子2・鉾3・鏃	北野 1964
83	紫金山古墳	方円	石柵	割竹形木棺	主	棺外(柵内)／頭部上方／左 棺外隅(柵内)／頭部上方／左 棺外隅(柵内)／頭部上方／右	北(丘)	北(丘) 北(丘) 北(丘)	2 2 2	3 3 3	— — —	刀剣類？・龍手・鉄斧の間に鉄鏃2 鉄剣？・鉾・鋳・鏃・短	小野山ほか 1993
84	駒ヶ谷宮山古墳 前方部第1粘土柵	方円	粘土埴	組合式木棺	副	棺外(粘土床中)／脚部下方／右	北西(平)	南南東(丘)	1	1	—		北野 1964
85	井天山C1号墳 後門部竪穴式石室	方円	石柵	割竹形木棺	主	棺外端(粘土床中)／脚部下方／中央(右)	北北西(丘)	南(丘(→平？))	2	1	刀子・鏃2		堅田ほか 1967
86	井天山B2号墳 東柵	円	粘土埴	割竹形木棺	主	棺外端(粘土床下・遺渠上)／脚部下方／中央	北(丘、平)	南(平)	2	1	刀子・鉾2・鏃		堅田ほか 1967
87	国分ヌク谷北塚古墳	？	粘土埴	割竹形木棺	？	棺外(粘土床下)／頭部／右	北～北北西 (丘)	北西 (平・丘)	1	1	—		北野 1964
88	北玉山古墳	方円	石柵	割竹形木棺	主	棺外(柵内)／脚部上半／左 棺外(柵内)／脚部下半／左	東南東(丘)	南西(平・平一丘) 南西(平)	1 1	3 3	鉄斧に挟まれて、北から刀子・鉾・鉄鏃・鋳先・鏃の順に配置		末永 1964
89a	和泉黄金塚古墳 中央柵	方円	粘土埴	割竹形木棺	主	棺外(柵内)／頭部／右 棺外(柵内)／脚部上半／右 棺外(柵内)／脚部直下／右 棺外(柵内)／脚部下方／右	北東 (平・平一丘)	北(平)	1	3	鉄刀		末永ほか 1954
								西北西(平→海)	1	3	鏃・鉄刀？	鏃	
						西(平→海)		1	3	鉄刀？			
						南西 (平→海、平一丘)		3	3	鉄剣？	鉄製工具類？		
89b	和泉黄金塚古墳 東柵		粘土埴	組合式木棺	副	棺内隅(副室)／頭部上方／左 棺内端／脚部下方／中央	北東 (平・平一丘)	北東(平一丘、平)	2	2	—	刀子・鉾・鋳先・摘鏃・不明鉄器	
								南西(平一丘)	7	2	—		
奈 良 県													
90	マエ塚古墳	円	粘土埴	割竹形木棺	主	棺外端～隅(遺物床)／頭部上方／右	北(丘)	北(丘)	9	3	鋳先9・鏃4		小島ほか 1969
91	池ノ内1号墳 東柵	円		割竹形木棺	主？	棺外隅？(堀方と木柵の間)？／頭部上方／右	北～北北東 (丘→)平一丘)	北(丘→)平一丘)	1	1	—		泉森 1973
92	池ノ内3号墳	円	粘土埴	組合式木棺	主	棺外端(棺小口外粘土中)／脚部下方／中央(左)	西北西 (丘、平→丘)	東南東(丘)	1	3	—		泉森 1973
93	タニグチ1号墳	円	粘土埴	割竹形木棺	主	棺外(柵内)／頭部上方／左 棺外(柵内)／頭部直上／左 棺外(柵外)／脚部上半／左 棺外(柵外)／脚部上半／左	南東～南南東(丘)	南(丘)	1	3	鉄斧に挟まれて、北から筒形銅器2・鉾2・鉄刀・針金・刀子3・鉾・鋳		河上・西藤 1996
								南(丘)	1	3			
								南西(丘)	1	3	鉄斧に挟まれて、北から鉄鏃2・鏃・鉄剣2・鋳・鉾・鉄剣・小刀子3・鉄鏃3・鉾・鏃・鋳先・鋳・鏃		
94	新沢213号墳	方円	粘土埴	割竹形木棺	主	棺外隅(柵内)／頭部上方／左 棺外隅(柵内)／脚部下方／左	南(丘)	南(丘)	1	3	—	鏃・不明鉄器2	伊達ほか 1981
								北(平一丘)	2	3	刀子3・不明鉄器2		
95	丸尾4号台状墓	方		組合式木棺	主	棺外端(墓境内)／頭部上方／中央	北北東(平一丘)	北北東(平一丘)	1	3	鉄剣・鉄鏃・鉾		井上・仲 1989
96	丸尾5号台状墓	方		組合式木棺	主	棺外(墓室内)／胸部／右	南(丘)	南東(丘)	1	3	—		
97	池ノ内5号墳 第1柵	円		組合式木棺	副	棺外端(墓境内)？／脚部下方／左 棺外(墓境内)？／脚部下方／左	南東(丘)	北東(平一丘)	1	3	短甲・鉄鏃8・刀子		泉森 1973
								北(平一丘)	1	3	—		
98	北原西古墳	方方		割竹形木棺	主	棺外隅(棺上)／頭部上方／右 棺外(墓境内)／胸～腰部／右	東(丘)	東(丘)	1	3	—		楠本・朴ほか 1993
								北(平一丘)	1	3	鉄鏃・刀子2・鉾3・鏃2		
99	北原古墳 北柵	方		割竹形木棺	主	棺内／脚部下方／中央	西 (丘(北原西古墳))	東(丘)	1	2	短冊・鉄剣・刀子3・鉾・鏃5・摘鏃・鋳先2・針2		楠本・朴 1986
100	谷畑古墳	円		組合式木棺	主	棺外(墓境内)／頭部上方／左	北(丘)	北(丘)	1	3	鉄剣2・刀子・鉾・鋳・鏃		友成ほか 1974
101	上殿古墳	円	粘土埴	割竹形木棺	主	棺外(柵内)／頭部直上／左 棺外(柵内)／脚部下方／左	北～北北西 (平一丘)	北～北北東 (平一丘)	4	3	鉄剣17・鉄製柄付鉄斧2		伊達 1966
								南東(丘)	2	3	平指・刀子5・鉾10・鋳7・鋳先8・鏃12		

※1：表中の「No.」は第1～4図および各表に対応している。 ※2：時期は基本的に報告書による。弥生時代中期後半が1a・1b・33、後期が1c～3、後期後半～終末期が4～7・33・36・37a・37b・47・58・59・66であるが、明確な墳丘を持ち、埋葬主体に限られるものは古墳と同様に分析対象としている。 ※3：墳丘は「方円」が前方後円墳、「方方」が前方後方墳、「円」が円墳、「方」が方墳を示す。方形台状墓も方墳に含めている。 ※4：埋葬主体の序列は中心となるものが「主」、中心主体ではない場合は「副」、墳丘周辺に位置する場合は「周」として表している。 ※5：指向地形は平野を「平」、丘陵を「丘」で表している。また、丘陵と平野が見える場合は「、」で区切っている。

第2表 府県別にみた頭位（方角）の様相

	西南西	西	西北西	北西	北北西	北	北北東	北東	東北東	東	東南東	南東	南南東	南	南南西	南西	総計
福岡県		2(8.0%)		4(16.0%)	1(4.0%)	1(4.0%)		5(20.0%)	4(16.0%)	4(16.0%)		4(16.0%)		1(4.0%)		1(4.0%)	25(100%)
宮城県		1(33.3%)							1(33.3%)			1(33.3%)					3(100%)
香川県		1(16.7%)	2(33.3%)	1(16.7%)			1(16.7%)									1(16.7%)	6(100%)
徳島県									1(20.0%)	3(60.0%)				1(20.0%)			5(100%)
山口県		1(25.0%)		1(25.0%)				1(25.0%)				1(25.0%)					4(100%)
広島県				2(20.0%)			1(10.0%)		1(10.0%)		5(50.0%)		1(10.0%)				10(100.0%)
岡山県		1(11.1%)					3(33.3%)	1(11.1%)			2(22.2%)		1(11.1%)		1(11.1%)		9(100%)
鳥根県					1(25.0%)		1(25.0%)				1(25.0%)		1(25.0%)				4(100%)
鳥取県										1(50.0%)	1(50.0%)						2(100%)
兵庫県			2(25.0%)				3(37.5%)		1(12.5%)					1(12.5%)	1(12.5%)		8(100%)
京都府					2(12.5%)		5(31.3%)		3(18.8%)		4(25.0%)			1(6.3%)		1(6.3%)	16(100%)
大阪府			1(10.0%)	1(10.0%)	1(10.0%)		3(30.0%)		2(20.0%)			1(10.0%)	2(20.0%)				10(100%)
奈良県		1(8.3%)	1(8.3%)				4(33.3%)	1(8.3%)			1(8.3%)		2(16.7%)		2(16.7%)		12(100%)
総計		7(6.1%)	3(2.6%)	11(9.6%)	5(4.4%)	22(19.3%)	4(3.5%)	12(10.5%)	3(2.6%)	21(18.4%)	2(1.8%)	13(11.4%)		7(6.1%)	10(9.9%)	3(2.6%)	114(100%)

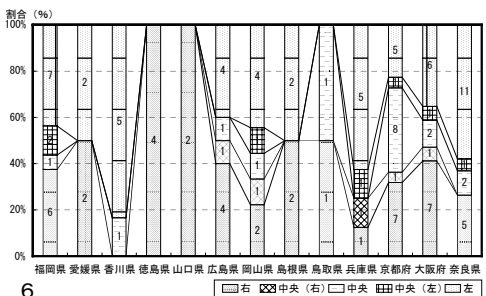
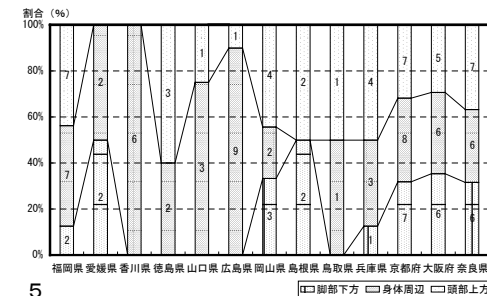
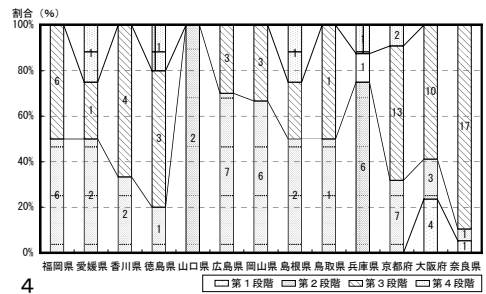
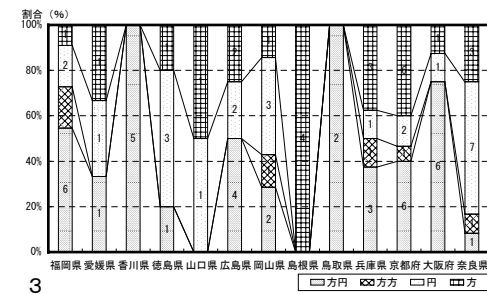
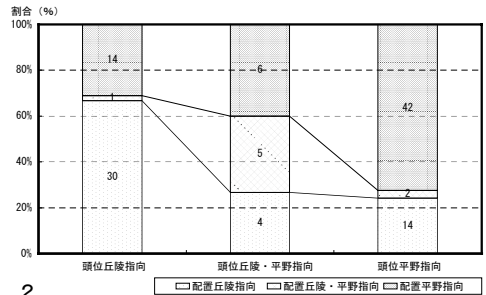
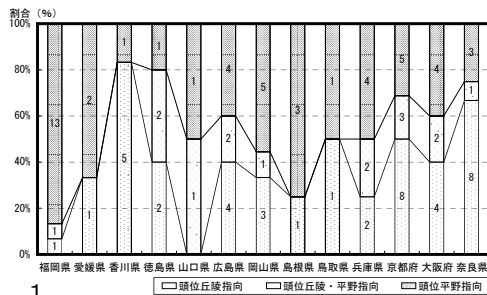
## 2. 袋状鉄斧副葬の地域性について

### (1) 頭位と指向地形の検討

袋状鉄斧を副葬する古墳の頭位は、第2表に示すように兵庫県・京都府・大阪府・奈良県の畿内地域は北側、それ以外の地域では東側がやや多い傾向がある程度で、それから外れるものも多くある。また、指向地形については、第5図1から、北を避ける福岡県域では圧倒的に平野指向が多く、逆に北頭位が多い京都府・大阪府・奈良県域には丘陵指向が多い特徴がある。一方、兵庫県域では、北頭位が多いにも関わらず、指向地形は平野が多い古墳がある一方、香川県では北頭位は少ないが頭位の指向地形が丘陵である古墳が多い。広島県太田川流域や徳島県吉野川南岸地域のように頭位が決まっていた可能性も考えられる地域もあるが、第1図で見ると、やや主観的ではあるが、頭位が方位により決定していたというよりも、多くは墳丘上から見える地形によって頭位を選択していた可能性が考えられる。また、頭位の指向地形をもとに、袋状鉄斧の配置された方向の地形をみると（第5図2）、頭位の指向地形が丘陵、あるいは逆の平野である古墳はそれぞれ約7割が頭位と同じ地形の方向に袋状鉄斧を配している。これらの点から、頭位および袋状鉄斧の配置位置の地形には指向性があると想定できよう。以上のように地形に指向性がある可能性を想定し、以降では基本的な区分の1つとして、埋葬施設を中心として、頭位および配置方向の地形により丘陵指向、丘陵・平野指向、平野指向の3類型を設定する。各地域でみると、兵庫県域を除く近畿地方と香川県域において丘陵指向の古墳が卓越し、逆に福岡県では平野指向の古墳が卓越していると言える。その間の中国・四国地域では漸移的である。

### (2) 墳形と副葬段階の検討

次に、府県別に墳形と副葬段階を見てみる。まず第5図3から、墳形では香川県・鳥根県・大阪府のように前方後円墳が卓越する地域、鳥根県のように方墳が卓越する地域、徳島県・岡山県・奈良県のように円墳が多い地域が見られるが、あまりまとまりはない。一方、袋状鉄斧の副葬段階を見ると（第5図4）、第2段階が多い中国地方の各県と兵



1：府県別にみた頭位指向地形の割合比較、2：頭位指向地形別にみた配置指向地形の割合比較、3：府県別にみた墳形の割合比較、4：府県別にみた配置段階の割合比較、5：府県別にみた垂直軸に対する配置位置の割合比較、6：府県別にみた左右軸に対する配置位置の割合比較

第5図 府県別にみた各要素の割合比較

庫県、第3段階が香川県・徳島県・大阪府・京都府・奈良県の東側地域に分けられる。これに頭位指向地形をふまえて、その様相を見ると（第3表）、丘陵指向の古墳では第3段階が多く、丘陵・平野指向、平野指向の古墳では第2段階が多くなっている。また、府県別にみると（第4表）、丘陵指向の古墳は第3段階、丘陵・平野指向あるいは平野指向の古墳は第2段階がそれぞれ対応しており、その境界は兵庫ー香川付近である。この他、丘陵・平野指向の古墳は円墳あるいは方墳が中心となっているという特徴を指摘できる。

### （3）副葬位置の検討

袋状鉄斧の副葬位置を垂直軸と左右軸に分けてみると（第5図5・6）、両者の



第3表 墳形別にみた頭位指向地形・配置段階の墳形の様相

	頭位丘陵指向				頭位丘陵・平野指向				頭位平野指向			
	第1段階	第2段階	第3段階	第4段階	第1段階	第2段階	第3段階	第4段階	第1段階	第2段階	第3段階	第4段階
前方後円墳	85	23a/23b/ 39/56/70	22/25/ 26/ 29/47/ 69/ 83/88/ 94	73		42/51b		62	84	10/12/13 a/13b/19 /41/51a/ 63/72/ 80/89b	15/16a/ 16b/ 24/44/5 7/60/77 /82/ 89a	19
前方後方墳			48a/98							8/48b/61	11/71	
円墳		64	18/76/ 90/ 93/97/ 100	28	86	38/75	14/31/ 92		91	9/20/27/ 35/50	43/101	
方墳		37b/46/ 58/67/ 78/99	21/37a/ 54/ 66/96	68		34/59/ 79a/81	30/79b			40/49/ 52/55/ 65	45/74/ 95	53
小計	1	12	22	3	1	8	5	1	2	24	17	2
合計	38				15				45			

※小計・合計意外の数字は遺跡・遺構番号に対応し、太字は副次的主体、周辺主体を示す（以下の表でも同じ）。

第4表 府県別にみた頭位指向地形・墳形・配置段階の様相

		福岡	愛媛	香川	徳島	山口	広島	岡山	島根	鳥取	兵庫	京都	大阪	奈良	合計
丘陵指向型	第1段階	方												1	1
	方														
	円														
	方														
	第2段階	方			2		1			1		1			5
	方													1	1
	円														1
	方						1	1			1	2			5
	第3段階	方			3	1		1				1	2	1	9
	方														2
	円							1							1
	方	1										1			4
丘陵・平野指向型	第1段階	方													
	方														
	円														
	方														
	第2段階	方						1	1						2
	方														
	円							1				1			2
	方										1	1	1		4
	第3段階	方													
	方														
	円	1			1							1			3
	方					1						1			2
平野指向型	第1段階	方											1		1
	方														
	円														
	方													1	1
	第2段階	方	4	1				1	1			1	2	1	11
	方														4
	円	1	1					1				1			4
	方				1	1		1							4
	第3段階	方						1	1	2		1			5
	方	3		1				1			1	1	2		10
	円	1										1			2
	方							1				1		1	3
合計	方				1										1
	方														
	円														
	方								1						1

様相は異なっている。垂直軸では、岡山県を除く瀬戸内海沿岸域では、広島県・香川県を中心として身体周辺への配置が多く、その周囲は漸移的に身体周辺への配置が減少し、頭部上方への配置が増加している傾向を読み取ることができる。また、愛媛県の朝日谷2号墳を除くと、福岡県・四国・広島県以西では脚部下方への配置が少ないか、あるいは皆無であるのに対して、兵庫県を除く近畿地方では、脚部下方への配置の割合が比較的多くなっている。一方の左右軸では、東に行くにしたがって漸移的に左側配置の割合が多くなる程度で、垂直軸ほど大きな差異は見出せない。ただし、その中で、香川県・徳島県・山口県ではそれぞれ左右のいずれかでほぼ占められている点は他の地域とは異なっている。さらに、隣接する香川・徳島両地域でまったく逆位置に配置している点は、墳形が両地域でまったく異なることと合わせて興味深い点である。

続いて、頭位指向地形・配置指向地形・墳形と合わせて身体位置への配置の様相を見てみる（第5表）。まず身体の垂直軸に対する配置では、頭位指向地形と袋状鉄斧の配置指向地形が同じ場合、腰部以上への配置が目立ち、頭位指向地形と配置指向地形が異なる場合には脚部以下への配置が多くなる傾向がある。一

第5表 配置位置別にみた指向地形・墳形の様相

頭位	墳形	配置 身体位置	丘陵側					丘陵・平野					平野側				
			右	中央(右)	中央	中央(左)	左	右	中央(右)	中央	中央(左)	左	右	中央(右)	中央	中央(左)	左
丘陵指向	方円	頭部上方	69/83				69/83/94										
		頭部	56			23a	23b/26										
		胸部		70													
		腰部															22
		脚部上半					25										88
		脚部下半											39				88
	方	脚部下方		85									47/73				94
		頭部上方	48a/98														
		頭部															
		胸部	98														
		腰部															
		脚部上半															
	円	脚部下半															
		脚部下方															
		頭部上方	90				18/93/ 100										
		頭部					93										
		胸部															
		腰部											28				
	方	脚部上半					93										
		脚部下半					21/93						76				
		脚部下方															64/97
		頭部上方															
		頭部															
		胸部	96		66/78		46/58										
丘陵・平野指向	方円	腰部					68	37a									
		脚部上半															
		脚部下半											67		37b		
		脚部下方			99												54
		頭部上方												42			
		頭部															51b/62
	方	胸部															
		腰部															
		脚部上半															
		脚部下半															
		脚部下方															
		頭部上方															
	円	頭部															
		胸部															
		腰部					14		75								
		脚部上半											38				
		脚部下半															
		脚部下方			92										86		
	方	頭部上方						34					30				
		頭部						59		79a		79b					
		胸部															
		腰部															
		脚部上半															
		脚部下半															
平野指向	方円	脚部下方					81										
		頭部上方											10/16a/16b		13b/57	13a/82	63/80/89b
		頭部					60						12/89a				17b
		胸部															
		腰部															
		脚部上半					24						89a				
	方	脚部下半					41						17a/44/89a				17b/17c
		脚部下方	77/84		77	15/72	19/51a						19/89a		89b		
		頭部上方											71	48b/61	71		
		頭部															
		胸部															
		腰部															8
	円	脚部上半															
		脚部下半															
		脚部下方											11				
		頭部上方											31/91				
		頭部											20/27				43/101
		胸部															
	方	腰部															
		脚部上半															
		脚部下半											35				
		脚部下方					50/101										
		頭部上方						52					53		49/95	65	45
		頭部										40					9
平野指向	方	胸部															
		腰部															
		脚部上半															
		脚部下半															
		脚部下方													74		55
		脚部下方															

方、左右軸では、めだって有意な差は見出せないが、腰部以上では右側、脚部以下では左側に配置する傾向があるように思われる。それが顕著なのは島根・鳥取であるが、長法寺南原古墳では1埋葬施設内においてもそのような配置がみられる。このような配置は第5表に見るように、前方後方墳・円墳・方墳に見られることから、左右は墳形と関係している可能性が考えられる。これに対して、前方後円墳は後述するような複数ヶ所に配置する場合は左右あるいは上下の一方に配置する例があり、その様相は異なっている。

次に、一埋葬施設内において複数ヶ所に袋状鉄斧を配置する例が畿内の丘陵指向型の古墳にみられるが、これらには棺外頭部小口付近に配置する椿井大塚山古墳・紫金山古墳、すべて左側縁に配置する北玉山古墳・タニグチ1号墳・新沢213号墳・池ノ内5号墳・上殿古墳、すべて右側縁に配置する和泉黄金塚古墳中央櫛・北原西古墳などがある。この中で、北玉山古墳とタニグチ古墳では、袋状鉄斧に挟まれる状況で各種副葬品が配置されている点でも共通している。これ以外では頭部上方と脚部下方に分けて配置している和泉黄金塚古墳東櫛・長法寺南原古墳などがあるほか、京都府域では弁天山C1号墳・弁天山B2号墳・駒ヶ谷宮山古墳・国分ヌク谷北塚古墳において棺床内あるいは棺床下の排水溝上に配置する第1段階配置である点で共通している。これらの埋葬施設では頭位指向地形や墳形などは異なっているが、弁天山C1号墳と弁天山B2号墳、駒ヶ谷宮山古墳と国分ヌク谷北塚古墳はそれぞれ近接した位置にあり、より小さな地域性と考えられよう。同じ第1段階の可能性がある例としては、池ノ内1号墳東棺が挙げられるが、これは埋葬壙と棺の間での出土であり、やや様相を異にしており、共通の葬送様式の範疇に含まれるかは疑問である。以上のように、畿内地域では地域・墳形などを越えた袋状鉄斧の配置状況があり、これらが被葬者間の関係を表していた可能性を指摘しておきたい。

#### (4) 袋状鉄斧副葬の地域性について

前項までの検討により、袋状鉄斧を副葬する古墳は香川県・岡山県・兵庫県付近をグレーゾーンとして大きくは東西の2地域に分けることができる。西側地域では頭位平野指向・袋状鉄斧配置平野指向・第2段階配置・身体周辺配置の傾向があり、東側地域では頭位丘陵指向・袋状鉄斧配置丘陵指向・第3段階配置・棺槨端部配置の傾向がある。また、左右の配置では、前方後方墳・円墳・方墳では腰部以上右側・脚部以下左側に配置するという傾向があり、地域を越えて共通しているようである。また、前方後円墳では、左右のどちらに配置が偏る例もしばしばみられた。一方、方墳は明瞭な差異を抽出することはできなかった。

次に弥生時代の袋状鉄斧の副葬状況と比較してみたい。弥生時代から袋状鉄斧の副

葬が見られる地域は、福岡県・山口県・広島県・岡山県・兵庫県・京都府のように広い地域で見られるが、その数は少なく、また、ほとんどは弥生時代終末期前後に属している。また、弥生時代の例が複数見られる福岡では筑後平野と北九州・京都郡周辺、山口では山口平野、広島では太田川左岸地域でみられるように、分布は地域的に限られている。以上の地域の中で、古墳時代初頭の古墳において袋状鉄斧が見られる例として、筑後平野では神蔵古墳、北九州・京都地域では徳永川ノ上遺跡E地区1号墳主体部<sup>(9)</sup>、広島太田川左岸地域では弘住3号墳、岡山平野では七つグロ1号墳があり、これらと弥生時代の諸例を比較すると、それぞれ頭位指向地形には共通しているようだが、配置位置等は異なっている。弥生時代では1埋葬施設につき1点程度副葬されていた鉄器は、各集団内における階層を反映した器種を、器種に応じて左右に配置している可能性を指摘したが<sup>(10)</sup>、これらの器種を古墳の1埋葬施設に集約して副葬する点で異なっており、この段階で配置に関する理論も一新されたのであろう。上述の墳形による配置が墳形で異なることもこれを示唆していると思われる。一方で、階層等に関係しない頭位（指向地形）については、弥生時代以来の伝統が続いたと推測される。

### 3. 副葬袋状鉄斧の機能について

#### （1）一括配置器種組成の検討

まず、ほぼ同一ヶ所に一括して配置された副葬品の器種組成から検討してみたい。第6表から、最も多いのは、他の器種を伴わず袋状鉄斧のみを単独で配置したものが多いことが分かる。これらの単独配置は福岡県を除くと各地域において見ることができる。続いて多いのは、袋状鉄斧＋鉈である（以下、全て袋状鉄斧を含むので、袋状鉄斧は省略する）。この組成は前方後円墳では中国地方に限られ、円・方墳では兵庫～京都にかけて見られるように、その分布において地域性を示している。前方後方墳の福岡県徳永川ノ上遺跡E地区1号墳主体部においても見られるが、これは地理的に中国地方に近いためであろうか。これ以外では、特に多い組成はないが、袋状鉄斧＋短冊形鉄斧あるいは刀子・鉈を基本とする組成が目立つ。刀子・鉈を基本とする組成では、特に地域的な特徴は見出せないが、器種組成の面では刀子・鉈に加えて①鉄剣・鉄鎗、②鉄鎌、③鋤先、④その他の器種、の順に器種が増える様相が窺える。例が少ない鉄剣・鉄鎗を除くと、先に鉄鎌が組成に加わり、その後鋤先がそれに加わる傾向は他の組成においても認め、また、鉄鎌、鋤先が加わる場合、それは前方後円墳よりも、円墳・方墳に多くみられる傾向がある。一方、短冊形鉄斧を含む組成では、七つグロ1号墳後方部第1石槨が例外的であるが、短冊形鉄斧＋鉈、あるいは短冊形鉄斧＋農具の組成は円墳・方墳、刀

第6表 墳形別にみた一括配置器品の器種構成の様相

	前方後円墳	前方後方墳	円墳	方墳
鉄剣	寺戸大塚古墳前方部石櫛・和泉黄金塚古墳中央部			
鉄剣＋鉄製柄付鉄斧			上殿古墳	
(鉄刀)	若八幡宮古墳・和泉黄金塚古墳中央部			安満宮山古墳
鉄刀＋鉄	和泉黄金塚古墳中央部			
鉄鏃	丸井古墳第1石櫛	長法寺南原古墳		みそのお46号墓第1主体
鉄鏃＋銅鏃＋箭形銅器	妙果山古墳			
鉄鏃＋弓形工具	横井大塚山古墳			
鉄鏃＋鋤先＋不明鉄器			額町妙見1号墳第2主体	
短冊形鉄斧	中小田1号墳・用木3号墳第1主体			国森古墳
短冊形鉄斧＋鉄刀	龍子三ツ塚古墳			
短冊形鉄斧＋石臼・杵		長法寺南原古墳		
短冊形鉄斧＋刀子		長法寺南原古墳		
短冊形鉄斧＋刀子＋鉄剣＋鉄鏃		七つクロ1号墳後方部第2石櫛		
短冊形鉄斧＋鋤			用木1号墳第1主体	
短冊形鉄斧＋鋤＋鋤先				社日古墳
短冊形鉄斧＋鉄鏃		七つクロ1号墳後方部第1石櫛		
短冊形鉄斧＋刀子＋鋤＋鉄				曾我氏神社2号墳
刀子	駒崎古墳2号棺			新宮東山古墳第2主体
刀子＋鋤	田久瓜ヶ坂1号墳第1主体		一本松古墳	
刀子＋鋤＋鉄剣	奥3号墳部穴式石櫛			
刀子＋鋤＋鉄剣＋鉄鏃	駒崎山4号墳			
刀子＋鋤＋鉄剣＋鉄鏃＋鋤先	萱葉2号墳			
刀子＋鋤＋鉄剣＋鉄鏃(＋鋤先)＋ $\alpha$	老司古墳1号石室( $\alpha$ ＝鑿・砥石)・老司古墳3号石室( $\alpha$ ＝鉄刀・鉄鏃・鉄鏃・短甲)		谷畑古墳( $\alpha$ ＝鑿・鋤)	ヒル塚古墳( $\alpha$ ＝鑿)／北原古墳北棺( $\alpha$ ＝鉄鏃・針)
刀子＋鋤＋鉄鏃		井天山B2号墳東部		
刀子＋鋤＋鉄鏃＋鉄鏃		北原西古墳		
刀子＋鋤＋鋤先	田久瓜ヶ坂1号墳第2主体			
刀子＋鉄鏃	井天山C1号墳後方部部穴式石櫛		節句山2号墳	
刀子＋鉄鏃＋鋤先				竹並遺跡A地区15号墳
刀子＋鉄鏃＋不明鉄器			榎の谷杉谷支群1号墳	西山2号墳西側
鋤	奥3号箱式石棺・国分寺六ツ目古墳・宇那木山2号墳・大迫山1号墳・用木3号墳第2主体・馬の山4号墳	穂永川ノ上遺跡E地区1号墳主体部	平山古墳	ボラ山1号墓第1主体・西山2号墳中央部
鋤＋鋤	異名井古墳		蓮華谷2号墳	
鑿・鑿	水堂古墳			
鉄鏃	駒崎古墳3号棺		豊前坊2号墳・上安井古墳	
鏃＋鏃・短				梨ヶ谷遺跡B地点2号墓a主体
鏃＋棒状鉄器			有本1号墳第2主体	
鏃＋鋤先	面分寺古墳		長谷古墳・マエ塚古墳	高月山2号墳
鏃＋鋤先	神鹿古墳			今社8号墳第1主体
袋状鉄斧のみ	朝日谷2号墳・快天山古墳・弘住3号墳・矢原治山古墳・奥久山1号墳第3主体・紫金山古墳・園部堀内古墳・駒ヶ谷宮山古墳前方部第1粘土櫛・石不動古墳南棺・和泉黄金塚古墳東部・新沢213号墳	妙法寺2号墳・長法寺南原古墳・北原西古墳	天坊山古墳・池ノ内1号墳東部・池ノ内3号墳・池ノ内5号墳	梨ヶ谷遺跡B地点2号墓b主体・みそのお43号墓第1主体・土井・砂4号墳・奥才68号墳・神原神社古墳・上大谷6号墳・白米山西古墳・丸尾5号台状墓

子を含むものでは前方後方墳、短冊形鉄斧のみと短冊形鉄斧＋鉄刀は前方後円墳のように、器種と墳形の間には一定の相関関係が存在していたことが考えられる。このことは、鏡・鉄剣・鉄刀を含む組成や、鉄鏃を基本とする組成に前方後円墳が多い一方、農具を中心とする組成では円墳・方墳が多いことから首肯できよう。この他に、鉄鎌・鋤先のみの組成がある点に留意したい。

以上のような第6表に挙げたような基本的な器種組成に含まれないものとして、老司古墳3・4号石室、権現山51号墳、中出勝負峠8号墳SK1、池ノ内5号墳第1棺、金谷1号墓第10主体などがある。この中で、金谷1号墓第10主体は未成品と考えられるものばかりであり、特に異なっている。これらは上記の組成以外の組み合わせがあり、他の器種の検討が必要であろう。

次に指向地形・配置位置と器種組成の関係について見てみたい(第7・8表)。頭位・配置の両指向地形を見ると、基本的にそれぞれ指向地形は共通しているが、袋状鉄斧のみ場合には26例中10例が頭位と配置の指向地形が異なっており、他と比べると割合的に多くなっている。この中でも円墳・方墳ではその傾向が強い。一方、配置位置では、前節で検討した腰部以上右側、脚部以下左側配置とは逆になるものが前方後円墳には非常に多くなっている。特に袋状鉄斧のみの場合、15例中12例(80%)が逆である。そ

第7表 指向地形別にみた墳形および一括配置品の器種構成要素

	頭位指向 配置指向	前方後円墳					前方後方墳					円墳					方墳				
		丘陵	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	平野	丘陵	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	平野	丘陵	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	平野	丘陵	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	平野
		丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野	丘陵・平野
鉄剣		1				1															
鉄剣+鉄製柄付鉄斧																1					
(鉄刀)						3												1			
鉄刀+鏡						1															
鉄鏡			1								1						1				
鉄鏡+銅鏡+筒形銅器			1																		
鉄鏡+弓形工具	1																				
鉄鏡+鋤先+不明鉄器													1								
短冊形鉄斧					1	1												1			
短冊形鉄斧+鉄刀					1																
短冊形鉄斧+石臼・杵											1										
短冊形鉄斧+刀子											1										
短冊形鉄斧+刀子+鉄剣+鉄鏡											1										
短冊形鉄斧+鋤																1					
短冊形鉄斧+鋤+鋤先																				1	
短冊形鉄斧+鉄鏡						1															
短冊形鉄斧+刀子+鋤+鏡																			1		
刀子						1															1
刀子+鋤						1							2								
刀子+鋤+鉄剣	1																				
刀子+鋤+鉄剣+鉄槌	1																				
刀子+鋤+鉄剣+鉄槌+鋤先					1																
刀子+鋤+鉄剣+鉄槌(+鋤先)+α						2						1					1				1
刀子+鋤+鉄鏡																1					
刀子+鋤+鉄鏡+鉄槌								1													
刀子+鋤+鋤先						1										1					
刀子+鉄鏡	1																				
刀子+鉄鏡+鋤先																					1
刀子+鉄鏡+不明鉄器																	1		2		
鋤		2			1	2	1				1		2						2		
鋤+鏡																	1				
鋤+鋤							1														
鉄槌						1						1				1					
鉄槌+鋤・鋤												1					1				
鉄槌+棒状鉄器												1					1		1		
鉄槌+鋤先						1											1				
鋤先						1											1				
袋状鉄斧のみ		3	2			3	1				1	2		2	1		1	2	1	2	3
合計		10	4		3	7	18	2	1		1	2	5	3	6	1	2		6	6	2

れ以外では円墳と方墳で腰部以上左側が若干多いほかは、基本的に腰部以上右側、脚部以下左側の配置となっている。したがって、指向地形の配置に対する影響はあまり大きくなく、基本的には墳形と身体位置が配置に大きな影響を与えているといえる。

## (2) 配置の詳細な検討

一括配置品の中には、配置順序が明らか、あるいは推定できる例が9例ほどある(第9表)。これらのうち半分以上の5例は袋状鉄斧を最後(上)に配置している。さらにこの中で若八幡宮古墳・七つグロ1号墳後方部第2石槨・安満宮山古墳<sup>(11)</sup>の3例は素環頭大刀・鉄剣・鉄刀の刀剣類をその前(下)に配置されている点で共通している。一方、長谷古墳では逆に袋状鉄斧を最初(下)に配置しているほか、萱葉2号墳においては中間段階で配置しており、必ずしも一定していない点もある。ただし、この2者は鎌の配置順序は異なるが、ともに最後(上)に鋤先を配置している点では共通しており、他の器種との関係により、数パターンの配置順序が存在した可能性が考えられる。あるいは、萱葉2号墳は、袋状鉄斧を基点として、若八幡宮古墳などのような配置順序と長谷古墳のような配置順序が組み合わさったものであるとも考えられるが、いずれにしても他の器種の状況を検討することが必要であろう。この他には、真名井古墳において袋状鉄斧と

第8表 配置位置別にみた墳形および一括配置品の器種構成の様相

[illegible]

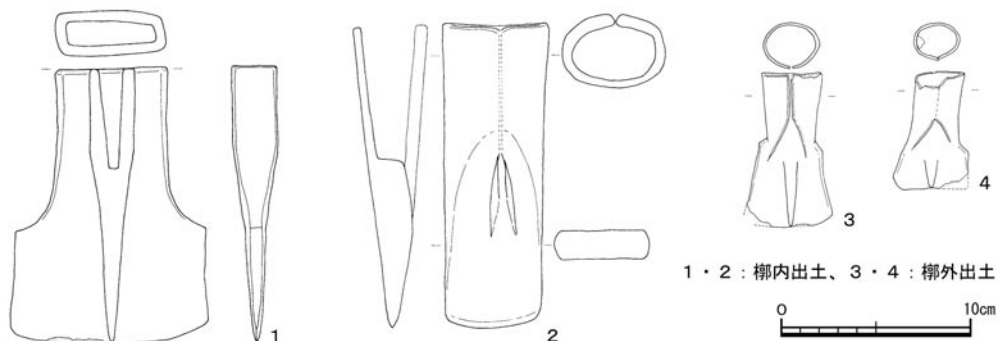
第9表 袋状鉄斧の配置における順序が分かる例およびその配置順序

[illegible]

鉈の前後関係は不明であるが、蓮華谷古墳とともに、鏡の上に袋状鉄斧と鉈を配置していた点で共通している。今回は例が少なかったが、より詳細な順序が確認される例が増加すれば、配置順序のパターンに関してもより明確になり、その機能に関する情報を与えてくれると期待される。

さて、基本的な組成例およびそれ以外の組成例に含めなかった特殊な配置例として、北玉山古墳、タニグチ古墳がある。この2古墳は各種副葬品を埋葬施設の長軸方向に沿ってまとめて配置しているのであるが、いずれも袋状鉄斧をその両端に配置しているのである。北玉山古墳では1ヶ所のみであるが、タニグチ古墳は2ヶ所に同様な配置を行っている。タニグチ古墳の2ヶ所の副葬品はそれぞれ内容が異なり、棺外・槨内では武器類・工具類があるが、槨外ではさらに農具類が加わっている。その組成内容からすれば、北玉山古墳例は武器類・工具類・農具類がそろっているので、タニグチ古墳の槨外配置と共通する。別稿で型式学的側面からの検討は行うつもりであるのでここでは詳細には述べないが、タニグチ古墳では、第6図のように槨内出土の袋状鉄斧は有肩・無肩の違いはあるものの大型で重厚なつくりであるのに対して、槨外出土品は小形で薄い作りとなっており、大きな差がみられる。槨外の鉄斧を在地で製作されたものであるとすると、おそらく槨内出土品は非在地品あるいは舶載品の可能性もあるが、別の機会にその点は検討したい。さらに、配置においても差がみられ、槨内配置は「両鉄斧とも刃部をお互い相反する方向に向け」整然と配置されていたが、槨外配置ではやや乱れている。北玉山古墳では、タニグチ古墳とは逆に刃部を向い合わせるように配置している。北玉山古墳出土鉄斧は実測図では特徴が明らかでないが、おそらくは在在地製作品であろう。以上のような例から、袋状鉄斧には工具としての機能以外にも特別な意味を付加されていた可能性がある。この場合、単純には副葬品を画する機能と考えられるが、このような副葬品を画する例として、他に奈良県メスリ山古墳副室における袋状鉄斧を挙げることができる。<sup>(13)</sup>メスリ山古墳副室では、北端付近に農具類が一括して納められているが、袋状鉄斧は東西両側（左右軸の両端）に分かれて中央にその他の農具類を挟む状況で配置されている。和泉黄金塚古墳出土例もあるいはこのような区画する意味合いを持たせているのかもしれない。しかし、今回は、奈良県・大阪府以外の地域では見出せ





第6図 タニグチ古墳出土の袋状鉄斧 (S = 1 / 4) (河上・西藤 1996 年より改変)

なかったので、当地域独自のものかもしれない。

### (3) 副葬袋状鉄斧の機能

以上、一括配置品の器種組成や配置順序の様相を概観してきたが、これらを踏まえてここでは袋状鉄斧の機能について考えてみたい。筆者は袋状鉄斧の地域性について発表した際に、岡山県金蔵山古墳副室内の3つの盒内から出土した袋状鉄斧とその副葬品内容から、袋状鉄斧には本来の工具としての機能の他に、威信財的・農具的な2つの機能が存在していた可能性を指摘した<sup>(14)</sup>。前項までの検討からすると、タニグチ古墳例は櫛内の縦斧と、櫛外の横斧という機能差による可能性もあるが、前者が非在地製作品あるいは舶載品、後者が在地製作品である可能性高く、櫛内品は威信財的機能を有していたと考えてよいであろう。この他にも、鉄鏃・銅鏃・筒形銅器を副葬している妙見山古墳もその可能性を指摘できる。この他には鏡や鉄剣・鉄刀が同一ヶ所に配置される場合や、他の配置順序が他の農工具と連続しない場合には、威信財的機能を有していた可能性があげられる。また、この威信財的機能の中には、弘法山古墳出土の袋状鉄斧のように、中国における軍事権の象徴である「鉞」に類する機能も想定すべきであろう<sup>(16)</sup>。このことは、刀剣類と一括配置される例が前方後円墳に多いことや、被葬者に対する配置位置が他の墳形古墳とは異なっていることから妥当であると思われる。一方、農具的機能を有する例としては、短絡的ではあるが、鉄鎌や鋤先と一括副葬される例があることから、その可能性を想定することができる。しかし、これらは他の工具とともに副葬される例も多く、配置や組成からその機能を区分することは難しい。このような工具に鎌や鋤が一括配置品として加わるのは前方後円墳より円墳や方墳の方が多く、前方後円墳では農工具以外の組成があることからすると、前方後円墳ではより威信財的側面が強く、円墳・方墳に副葬される例では本来の工具的、あるいは農具的側面が強かったと考えられる。このように組成の面から想定ができる一方で、袋状鉄斧のみの配置も多く、これは機能の想定が難しく、形態的側面や、各地域内での検討が必要であろう。

一方、前稿の豊前地域における検討では、弥生時代の袋状鉄斧・鉄鎌・鋤先は階層的に下位に属する被葬者の副葬品であることを指摘したが、これらは棺外に配置されることが多く、古墳時代とは異なっている。北条芳隆は、副葬品の組成は「各地の有力集団墓で普遍的にかつ分散的に副葬されていた各品目がひとりの首長墓に集約」されたものであると指摘しており、筆者も上述の通り同様に考えるが、それが全て弥生時代と同じ意味合いであったかは問題である。弥生時代における袋状鉄斧の副葬例が鉋や刀子などと比べると非常に少ないことから、古墳時代に入って普及するには新たな意義付けがなされたと考えた方が妥当ではないだろうか。弥生時代における副葬品としての袋状鉄斧の機能は明らかでないが、古墳時代のそれは本来の工具としてだけではなく、配置や形態などから想定されるような威信財や、あるいは本稿では明確にできなかった農具的機能が考えられるし、さらにそれは墳形に対応している可能性は既に指摘した通りであり、古墳時代の袋状鉄斧は階層的には上位に位置する被葬者にも広く受け入れられているからである。

#### 4. まとめ

以上、袋状鉄斧の副葬様式の地域性、とその機能についての検討した結果をまとめると、地域を通して共通している要素と、地域によって異なる要素があることを指摘した。地域を通して共通している要素は、墳形と被葬者の身体に対する袋状鉄斧の配置位置、および袋状鉄斧と同一ヶ所に一括配置された器種組成の様相である。まず、前方後円墳では、器種組成は鏡や鉄刀・鉄剣・鉄鎗・鉄鏃などの武器類を伴うものがあり、これらの配置は他の墳形とは逆の腰部以上左側、脚部以下右側にくることが多い。ただし、さらに細かい配置では、近畿地方でみたようにいくつかのパターンが存在する可能性がある。次に前方後方墳では、鉄剣・鉄鏃などの武器類が含まれる点では前方後円墳と共通するが、配置位置が腰部以上右側、脚部以下左側にくる点で異なっている。一方、円墳・方墳では、おもに組成は工具・農具の組成であり、配置位置は前方後方墳と同様に、腰部以上右、脚部以下左が基本である。また、このような組成や配置などから、円墳・方墳が工具あるいは農具的機能を有するのに対して、前方後円墳・後方墳ではより威信財的な様相が強くなるというような墳形による袋状鉄斧の機能の差異があることが想定できた。このことは、袋状鉄斧+鉋の組成が多い中国地方の前方後円墳における袋状鉄斧の機能が単に工具に留まるのかを考えさせるものである。この他、配置位置に関して、頭位および配置指向地形が同じ場合は上半身、異なる場合は下半身に配置することを指摘した。ただし、頭位が丘陵であった場合、脚部は平野であるのは当然のこととも考え

られる。器種組成を検討した中で、農具が特に平野を志向して配置されているわけではないようなので、頭位とは異なり、配置に関しては指向性の有無は定かではないが、頭位指向地形と配置指向地形がともに同じになる場合が非常に多いのもまた事実として確認しておきたい。

一方、地域性が抽出できた要素は、頭位指向地形および袋状鉄斧の配置指向地形、袋状鉄斧の副葬段階、被葬者身体からの距離である。これらは、岡山県・香川県・兵庫県付近をグレーゾーンとして、大きくは東西2地域に分かれることを指摘した。西側地域では頭位指向地形・配置指向地形はともに平野、配置段階は棺内である第2段階、位置は身体周辺が一般的である。これに対して、東側地域では頭位および配置指向地形はともに丘陵で、配置段階は棺外の第3段階、位置は身体から離れた頭部上方・脚部下方が一般的である。

以上のような汎地域的な要素と東西の地域性のある要素は、前者が革新、後者が伝統と言い換えることができる。福岡県・広島県の弥生時代例の検討においては、頭位指向地形や、身体周辺に配置する点に変化がない一方で、古墳時代に入って、各地で副葬例が顕著になることは既に述べたとおりである。このように古墳時代の副葬品としての袋状鉄斧の副葬は前方後円墳体制という階層秩序の表現装置として新たに創出されたものであるということができよう。その一方、袋状鉄斧の副葬に直接関係はしないが、頭位は墳形のような階層秩序とは独立した地域固有のものであったと考えられる。

## おわりに

本稿は、頭位や配置における地形、配置位置の総合的な検討などを中心として考察を行い、ある程度の成果を挙げることができた一方で、その限界も明らかになった。墳丘上、周溝内、埋納施設からの出土品も除外しての検討であり、残された課題は多い。本来であれば、袋状鉄斧の形態を含めて考察を行うべきであるが、筆者の怠惰によりそこまで至らなかったのは反省すべき点である。<sup>(21)</sup>別稿を考えているので、今後の課題とした。また、今回見落としている例も多々あると思われるので、その際に補足できるよう今後も資料の収集に努めたい。以上、まだまだ未熟で検討すべき点が多いが、今後の研究の踏石になれば幸いである。

川越哲志先生には学部～大学院まで計6年にわたってお世話になりました。特に卒業論文や修士論文では日頃からご指導いただきありがとうございました。いまだにご教示いただいた成果を生かしきれていない点は反省の限りです。今後とも成果を生かすよう努力する次第です。最後になりましたが、先生の今後のご健康をお祈りしております。

## 註

- (1) 加藤徹・古瀬清秀「古墳時代前期における袋状鉄斧の生産と流通」(『道具の生産流通と地域関係の形成～縄文から古墳まで～』古代学協会中国四国支部合同大会研究発表要旨、古代学協会、2003年、101～118頁)。
- (2) 今尾は以下のように想定している。第1段階は棺内配置で、被葬者の姿が見えている段階。第2段階は棺外配置で、棺蓋はのせられており、被葬者の姿は見えない段階。第3段階は石室外・粘土各外への配置で、木棺自体も見えない段階である。今尾文昭「古墳時代の画一性と非画一性―前期古墳の副葬品配列から考える―」(『橿原考古学研究所論集』第6、吉川弘文館、1984年、111～166頁)。
- (3) 配置は、被葬者の位置が重要であるが、基本的に棺の中心を被葬者の中心とするほか、赤色顔料や鏡の位置なども参考としている。また、被葬者は基本的に身長160cmとして設定している。また、表中において頭部直上、脚部直下と細分した配置は、煩雑になるので頭部周辺・脚部下半を含めて分析している。
- (4) 埋葬に関わる墳形や埋葬施設、頭位、副葬品など全ての要素を含めて葬送様式という言葉で表す。
- (5) 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」(『考古学研究』第26巻、第3号、考古学研究会、1979年)。北条芳隆「古墳成立期にける地域間の相互作用―北部九州の評価を巡って―」(『考古学研究』第37巻、第2号、考古学研究会、1990年、49～69頁)。  
また本稿では東西南北を基本として、東西または南北に22.4°ずつ、合わせて45°ずつ8分割し、さらに境界上に来る場合を含めて16区分している。
- (6) 都出比呂志の以下の文献の36ページの図46に端的に表されているように、前方後円墳を頂点とした、墳形・規模によって表される身分秩序である。都出比呂志「古墳時代の中央と地方」(『古代史復元』6、講談社、1989年、35～41頁)。
- (7) これは一昨年度行った宇那木山2号墳の調査の際に墳丘上からの眺望の良さを見て感の印象からである。地形は報告書中の地形図や写真とフリーソフトカシミール3Dの鳥瞰図を参考とし、埋葬施設の中心から頭位、配置方向を見た場合の地形を示している。第1～4図は国土地理院の数値地図50mメッシュ(標高)に加筆している。
- (8) 椿井大塚山古墳は全体の副葬品の様相は明らかでないが、今回対象とした遺跡において棺周囲全面に配置している例はないので、紫金山古墳と同様に頭部上方のみか、あったとしても客部下方に2ヶ所ほどであろう。
- (9) この他に配置状況は明らかでないが、石塚山古墳においても袋状鉄斧が出土している。
- (10) 加藤徹「副葬品配置における左右の意味について―豊前地域の弥生時代後期を中心として―」(『考古論集』、河瀬先生退官記念事業会、2004年)。
- (11) 安満宮山古墳では、袋状鉄斧は他の農工具と離れて配置されているが、それらを繋ぐ状況で鉄刀が配置されていることから、他の農工具との配置順序を知ることができる。
- (12) 他の遺跡の袋状鉄斧を見ても、身部の厚さ非常に厚いものと、それほど厚くないものがあるようであり、また、厚さが薄いものでは袋部の閉じ方も合わせ目が開くものが多いようである。このような状況からすると、村上恭通が弥生時代において指摘しているのと同様に、古墳時代前期においても在地品は身の厚さが薄いもので、重厚な作りは非在地品である可能性が考えられる。筆者も中国・四国地域の袋状鉄斧は、古墳時代の前期前半までは弥生時代からあまり技術的な進歩が見られないことを指摘したが、これが古墳時代前期を通じて変化がみられないかどうかは検討の余地がある。また、タニグチ古墳出土の大型有肩鉄斧は野島永の分類によると、I式に入ると考えられ、これらの「輸入主体者としての畿内政権」の存在が想定されている点から、本例は舶載品の可能性が強いと思われる。野島永「古墳時代の有肩鉄斧」(『考古学研究』第41巻、第4号、考古学研究会、1995年、53～76頁)。村上恭通「鉄器普及の諸段階」(下條信行編『日本における石器から鉄器への転換形態の研究<平成7年度～平成9年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書>』、1998年、72～74頁)。
- (13) 伊達宗泰・小島俊次『メスリ山古墳』(奈良県教育委員会、1977年)。
- (14) 前掲註(1)文献
- (15) 本文中において述べているように、農工具→鉄刀類→袋状鉄斧の順に配置している例があり、鉄刀を間に挟んでいることから、袋状鉄斧が鉄刀の前に配置された農工具と同じような機能であったとは考えにくい。さらに言えば、異なる祭祀の結果であるともみることが出来る。
- (16) 弘法山古墳では、頭部の延長線上(頭部上方中央)に、袋所鉄斧が単独で埋葬施設と長軸をそろえて配置されており、一志茂樹や斉藤忠はこれを文献に見る「斧鉞」としての機能があったと想定している。中国の「斧鉞」については、野島永の論文の註(1)に紹介さ

- れているので参照していただきたい。一志茂樹「斧鉞（まさかり）考—長野県松本市弘法山古墳の歴史的位置—」（『信濃』第27巻、10号、信濃史学会、1975年）。齊藤忠「後論第四章 弘法山古墳出土の鉄斧とその機能」（『弘法山古墳』、松本市教育委員会、1978年、103～125頁）。前掲註（14）野島 1995
- (17) 農具的機能と言っても、農具に機能が限られるわけではなく、農耕祭祀に関わる際に使用された可能性も含めて使用している。
- (18) 前掲註（10）文献
- (19) 前掲註（5）北条 1990
- (20) 集落からの出土は比較的多いが、墳墓からの出土となると、例は少ない。大分県天瀬町五馬大坪遺跡（袋状鉄斧7点出土）や、本稿で対象とした横隈狐塚遺跡では1遺跡が多数出土する例もあり、豊前地域と同様に、筑後川周辺の地域的特徴としてとらえることができるかもしれない。これ以外では広島県の太田川流域の西願寺遺跡や梨ヶ谷遺跡で多数副葬されているが、西願寺遺跡の副葬品の様相やその後の配置位置の展開などから、筆者は外部から導入された葬送様式であったと考えている。綿貫俊一・坂本嘉弘編『五馬大坪遺跡』（天瀬町教育委員会、1989年）。
- (21) 墳丘上から出土した例としては徳永川ノ上遺跡E地区1号墳、宮の前遺跡C地点1号墳、徳重本村2号墳（以上福岡県）がある。この中で、徳重本村遺跡では鏡も墳丘上から出土している。周溝出土例としては、宮内第1遺跡2号墳丘墓、中峰2号墳（以上鳥取県）、立石墳墓群102号地点（兵庫県）、丸尾3号台状墓（奈良県）がある。ただし、中峰2号墳例は1号墳主体追葬時に埋葬施設から排出されたものであると想定されている。埋納施設出土例としては金蔵山古墳副室（岡山県）、広峯8号墳埋納土坑（京都府）、メスリ山古墳副室（奈良県）などがある。
- 宮の前遺跡：下條信行・沢皇臣編『宮の前遺跡（A～D地点）』（福岡県労働者住宅生活共同組合、1971年）。
- 徳重本村2号墳：熊代昌之編『徳重本村』（宗像市教育委員会、2002年）。
- 宮内第1遺跡2号墳丘墓：原田雅弘編『宮内第1遺跡 宮内第4遺跡 宮内第5遺跡 宮内2・63～65号墳（（財）鳥取県教育文化財団、1996年）。
- 中峰2号墳：岡本智則『中峰古墳群発掘調査報告書』（倉吉市教育委員会、1998年）。
- 金蔵山古墳：西谷眞治・鎌木義昌『金蔵山古墳』（倉敷考古館、1959年）。
- 立石墳墓群102号地点：瀬戸谷皓編『北浦古墳群・立石墳墓群』（豊岡市教育委員会、1987年）。
- 丸尾3号台状墓：井上義光・仲富美子編『野山遺跡群Ⅱ』（奈良県教育委員会、1989年）。
- 広峯8号墳：崎山正人編『駅南地区発掘調査報告書』（福知山市教育委員会、1989年）。
- メスリ山古墳：前掲註（13）文献

## 報告書一覧

### （福岡県）

- 池辺元明編『九州縦貫自動車道関係埋葬文化財調査報告XⅩⅧ』（福岡県教育委員会、1979年）。
- 岡崇編『田久瓜ヶ坂』（宗像市教育委員会、1999年）。
- 木下修編『神蔵古墳』（甘木市教育委員会、1978年）。
- 呉三郎編『竹並遺跡』（寧楽社、1979年）。
- 小池史哲編『九州横断自動車道関係埋葬文化財調査報告28』（福岡県教育委員会、1994年）。
- 沢田康雄『妙法寺古墳群』（那珂川町教育委員会、1981年）。
- 柴尾俊介編『高津尾遺跡4』（（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室、1991年）。
- 杉山富雄編『鋤崎古墳』（福岡市教育委員会、2002年）。
- 武田光正編『豊前坊古墳群・経塚』（遠賀町教育委員会、1996年）。
- 長嶺正秀・末永弘義編『下稗田遺跡』（行橋市教育委員会、1985年）。
- 速水信也編『横隈狐塚遺跡Ⅱ』（小郡市教育委員会、1985年）。
- 原俊一ほか編『埋蔵文化財調査概報—1983年度—』（宗像市教育委員会、1984年）。
- 柳田康雄・副島邦弘『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第2集（福岡県教育委員会、1971年）。
- 柳田康雄編『萱葉古墳群』（志免町教育委員会、1984年）。
- 柳田康雄編『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』（福岡県教育委員会、1996年）。
- 山口譲治ほか編『老司古墳』（福岡市教育委員会、1989年）。
- 山崎純男編『宝満尾遺跡』（福岡市教育委員会、1974年）。

### （愛媛県）

- 梅木謙一編『朝日谷2号墳』（松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター、1998年）。
- 藤田義之編『相の谷古墳群杉谷支群埋蔵文化財発掘調査報告書』（（財）愛媛県埋蔵文化財調査セ

ンター、1995 年)。  
 宮崎泰好編『高月山古墳群発掘調査報告書』(松山市教育委員会、1988 年)。  
 (香川県)  
 亀井芳文・大山真充編『川上・丸井古墳発掘調査概報』(長尾町教育委員会、1983 年)。  
 古瀬清秀『原始・古代の寒川町』(『寒川町史』、寒川町、1985 年)。  
 古瀬清秀編『快天山古墳発掘調査報告書』(綾歌町教育委員会、2002 年 a)。  
 古瀬清秀編『岩崎山古墳発掘調査報告書』(津田町教育委員会、2002 年 b)。  
 森下英治編『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第 28 冊(香川県教育委員会・  
 (財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団、1997 年)。  
 (徳島県)  
 天羽利夫・岡山真知子『徳島県博物館紀要』第 13 集(徳島県博物館、1981 年)。  
 天羽利夫ほか『徳島県博物館紀要』第 15 集(徳島県博物館、1984 年)。  
 菅原康夫・須崎一幸『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告 4』(徳島県教育委員会・  
 (財) 徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団、1994 年)。  
 末永雅雄ほか『眉山周辺の古墳－恵解山古墳群・節句山古墳群－』(徳島県教育委員会、1966 年)。  
 (山口県)  
 小野忠熙ほか編『松崎古墳』(宇部市教育委員会、1981 年)。  
 柴崎文男ほか『朝田墳墓群 V』(建設省山口工事事務所・山口県教育委員会、1982 年)。  
 乗岡和二三編『国森古墳』(田布施町教育委員会、1988 年)。  
 村岡和雄ほか『朝田墳墓群 VII』(山口県教育委員会、1986 年)。  
 (広島県)  
 荒川正己『梨ヶ谷遺跡発掘報告』((財) 広島市歴史科学教育事業団、1998 年)。  
 石田彰紀編『弘住遺跡発掘調査報告』(広島市教育委員会、1983 年)。  
 鍛冶益生編『山陽自動車道建設埋蔵文化財発掘調査報告 (IX)』((財) 広島県埋蔵文化財調査セ  
 ンター、1993 年)。  
 金井亀喜編『西願寺遺跡群』(広島県教育委員会、1974 年)。  
 佐々木直彦編『歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群』((財) 広島県埋蔵文化財調査センター、1986 年)。  
 潮見浩ほか『中小田古墳』(広島市教育委員会・広島大学文学部考古学研究室、1980 年)。  
 潮見浩ほか『I 考古編』(『東城町史』自然環境考古民俗資料編、東城町、1996 年)。  
 渡辺昭人編『上安井古墳発掘調査報告書』((財) 広島県埋蔵文化財調査センター、2001 年)。  
 (岡山県)  
 小郷利幸『有本古墳群』(津山市土地開発公社・津山市教育委員会、1997 年)。  
 神原英朗編『用木古墳群』(山陽町教育委員会、1975 年)。  
 近藤義郎編『七つグロ古墳群』(七つグロ古墳群発掘調査団、1987 年)。  
 近藤義郎編『矢藤治山弥生墳丘墓』(矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団、1995 年)。  
 椿真治編『みそのお遺跡』(岡山県教育委員会、1993 年)。  
 (島根県)  
 赤沢秀則ほか『奥才古墳群Ⅷ支群』(島根県松江土木建築事務所・鹿島町教育委員会、2002 年)。  
 大庭俊次編『社日古墳』(建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会、2000)。  
 蓮岡法暉ほか編『神原神社古墳』(加茂町教育委員会、2002 年)。  
 和田康宏ほか『湯の奥遺跡 登安寺遺跡 湯後遺跡 土井・砂遺跡』(日本道路公団中国支社・  
 島根県教育委員会、2001 年)。  
 (鳥取県)  
 梅原末治『因伯二国に於ける古墳の調査』(鳥取県、1924 年)。  
 佐々木古代文化研究室編『馬山古墳群』(佐々木古代文化研究室、1962 年)。  
 (兵庫県)  
 植野浩三編『ブラ山・ボラ山』(氷上郡教育委員会、1995 年)。  
 岸本道昭編『新宮東山古墳群』(加古川市教育委員会、1996 年)。  
 近藤義郎編『養久山墳墓群』(揖保川町教育委員会、1985 年)。  
 近藤義郎編『権現山 51 号墳』(『権現山 51 号墳』刊行会、1991 年)。  
 中川渉編『内場山城跡』(兵庫県教育委員会、1993 年)。  
 松本正信ほか『龍野市史』第 4 巻(龍野市、1984 年)。  
 松本正信ほか『天坊山古墳』(加古川市教育委員会、1970 年)。  
 村川行弘『尼崎市史』第 11 巻(尼崎市役所、1980 年)。  
 (京都府)  
 石井清司・有井広幸編『瓦谷古墳群』((財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター、1997 年)。

石崎喜久『京都府遺跡調査概報』第66冊（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、1995年）。  
 梅原末治『京都府文化財調査報告』第21冊（京都府教育委員会、1955年）。  
 梅本康宏・森下章司編『寺戸大塚古墳の研究』Ⅰ（（財）向日市埋蔵文化財センター、2001年）。  
 都出比呂志・福永伸哉編『長法寺南原古墳の研究』（大阪大学南原古墳調査団、1992年）。  
 寺沢知子編『園部垣内古墳』（同志社大学文学部文化学科、1990年）。  
 引原茂治・福島孝行『京都府遺跡調査概報』第97冊（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、2001年）。  
 樋口隆康『椿井大塚山古墳発掘調査報告』（真陽社、1998年）。  
 樋口隆康ほか「考古編」（『城陽市史』第3巻、城陽市役所、1999年）。  
 広瀬和雄編『白米山西古墳群発掘調査報告書』（奈良女子大学文学部古代文化地域学講座、2000年）。  
 山田良二「山城宇治一本松古墳調査報告」（『古代学研究』第42・43合併号、古代学研究会、1966年、14～22頁）。  
 榊井豊成ほか『ヒル塚古墳発掘調査概報』（八幡市教育委員会、1990年）。  
 （大阪府）  
 堅田直ほか『弁天山古墳群の調査』（大阪府教育委員会、1967年）。  
 鐘ヶ江一郎『安満宮山古墳』（高槻市教育委員会、2000年）。  
 北野耕平『河内における古墳の調査』（大阪大学文学部国史研究室、1964年）。  
 末永雅雄ほか『和泉黄金塚古墳』（日本考古学協会、1954年）。  
 末永雅雄『北玉山古墳』（関西大学考古学研究室、1964年）。  
 山中一郎編『紫金山古墳』（大阪府立近つ飛鳥博物館、2003年）。  
 （奈良県）  
 泉森皎編『盤余・池ノ内古墳群』（奈良県教育委員会、1977年）。  
 井上義光・仲富美子編『野山遺跡群Ⅱ』（奈良県教育委員会、1989年）。  
 河上邦彦・西藤清秀編『タニグチ古墳群（付 タニグチ墳墓群）発掘調査報告』（高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所、1996年）。  
 楠本哲夫・朴美子編『宇陀 北原古墳』（大宇陀町役場、1993年）。  
 楠本哲夫・朴美子ほか「北原西古墳の調査」（『大和宇多地域における古墳の研究』、宇陀古墳文化研究会、1993年）。  
 小島俊次ほか『マエ塚古墳』（奈良県教育委員会、1969年）。  
 伊達宗泰「和邇 上殿古墳」（『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第23冊、奈良県教育委員会、1966年）。  
 伊達宗泰ほか『新沢千塚古墳群』（奈良県教育委員会、1981年）。  
 友成誠司ほか『谷畑古墳』（榛原町教育委員会、1974年）。